

春光の揺らめき

竹宮辰

暖かな春の日のことだった。昼食を終えた僕たちは、里珠（リズ）の思いつきで三十分ほど離れた公園に出かけることになった。洒落た中華そばで腹を満たした彼女は、暖簾を出るとすぐにその提案をした。午後の黄色い日差しが、まぶたを閉じる手のひらのようにそっと降り注いでいたが、十時間も眠っていた僕とリズにとっては恰好の行楽日和だった。彼女がネットで見つけた、今が盛りのチューリップの花畑を見に行くのが目的だ。

「リズ、帽子が曲がってるよ」

彼女はベレー帽子を深く被りすぎていた。直そうとして手を伸ばすと、編み込んだ髪型が崩れるのを懸念してそれを拒否された。春らしい陽気で、薄手のシャツ一枚でも過ごせるくらいなのに、彼女は長袖のワンピースを着た上に薄いニットのカーディガンを羽織っている。

里珠という名前は、漢字よりもカタカナの方が似合う。リズという軽々とした心地よい発音を文字にするのなら、堅苦しい漢字よりもカタカナが相応しいに決まっている。漢字だと、文字が読みに追いついていない気がして重たすぎるのだ。そのことを話してみたら強く同意された。流石に署名の際は漢字を使うけれど、彼女の *リズ* の名前はどれも決まって「リズ」だ。高校の時からずっとそうしているらしい。リズは自分の名前をこよなく愛していて、太宰治の「リイズ」という短い小説を教えたらひどく気に入ってしまったことがある。しばらくは単行本まで買って持ち歩いていたくらいだ。リとズの間には伸ばしが入るが、自分の名前に似ている上に、作中で紹介されるルノワールの「リイズ（日傘をさすリイズ）」が美しい女性の絵であることがその小説の優れたところだと語っていた。僕は読んだものをそこまで純粹に自分自身に繋げることはないので、彼女が眩しく思われた。今

日のリズは日傘をさしているが、「リイズ」とは違って水色の生地に紺色の蝶の刺繍があらわれたものだ。

駅に着いた。ちょうど来た電車に合わせて早まった足取りを改札に阻まれた。仕方なく切符売り場に戻ってチャージする僕を、リズは改札の中で見つめていた。彼女の *Suica* は親のクレジットカードと紐づけられて *iPhone* の中に納められているので現金知らずなのだ。

「なんで残高ないと入れないんだろう。出る時にチャージするんだからいいじゃん」

「どうせ七分後に次の電車くるよ」

リズは僕のせいで乗り遅れた電車の尻を見送りながら微笑んでいた。その話し方に僕のせっかちを責めるニュアンスが少しだけ含まれているのを知りながら、乗り換え時間を調べるためにスマホに指を滑らせた。電車に乗るときは短い距離でも毎回時間を調べてしまう癖がある。僕が画面に顔を向けている間、彼女は左肩にかけていた小さな鞆の中を漁っていた。

「次の電車だと、着くのは一時半になるね」

「うん。ねえそれより、ティッシュ持ってない？」

調べ終わった僕はリズが鼻を両手で隠していることにやっと気が付いた。ポケットから袋を取り出して一枚引き抜き、半分に畳んだティッシュを鼻に当ててやる。その際、鼻の下から数センチ延びたものがちらりと流動的に光った。形だけ嫌がる素振りを示しながらもすぐに力が入って小鼻が膨らみ、柔らかい紙ごしに濡れた感触が指に伝わった。そのまま鼻の穴を紙ごとつまんで鼻の下に残った粘ついた透明の液体を綺麗にふき取る。

「恥ずかしいから鼻くらい自分でかむって、それ早くしまっつて」

湿ったティッシュをコンビニの袋に入れた。花粉の季

節は、少し値は張つても柔らかくて肌の荒れにくいティッシュと、ゴミを入れるためのビニール袋が毎日欠かさない。リズの鞆の中には化粧道具と財布以外にも、ハンカチや水筒やミントタブレットなどが必ず入っているが、ティッシュは持ち歩いていなかった。花粉症と付き合ひの長い僕の持ち歩いているものが、こんなときに役に立つ。

「最近、リズは花粉症の症状に悩まされはじめたが面倒くさがって耳鼻科にまだ行っていないようだ。よく晴れた日に、ドラッグストアで買った薬を飲んでいられるのを見かける。この前も、大きな楕円形の錠剤を苦しげに飲み込んでいた。電車に乗ってからも彼女の鼻の調子はますます悪くなって、何度も一人で鼻をかんだ。平日の昼下がり、人のまばらな車内で鼻をぐずつかせている人間は孤独である。とめどなく出てくる鼻水とたった一人で戦わなくてはならない。」

「大丈夫？」

「ねえ、なんか薬もってない？」

「そんなに酷い？ 持つてるけど、すぐ眠くなるやつだよ」

「いいよ。このままじゃティッシュなくなっちゃう」

花粉症で処方された薬の中でも一番つらい時に飲む強い薬しか持ち歩いていなかったが、隣で鼻をぐずつかせている姿を見かねて渡すことにした。花粉症とは中学以来の付き合いだが、最近毎晩飲んでいる薬が効いているのか、特に花粉が飛んでいる日にしか酷い症状は出ない。リズはいつも持ち歩いている水筒の中身でそれを一息に飲み干した。

「熱っっ」

水筒の中には彼女の母親が送ってきたハーブティーが

入っている。家を出る前に淹れたばかりの茶の匂いは夏の夜の野原のような香りがする。唇から舌の先をちろちろと出し入れして口内を冷ましているリズから紅茶を受け取って一口すすする。東京育ちのリズと違って北関東で大きくなった僕は、ステンレスの飲み口から漂う香りのついた蒸気を懐かしい気持ちで味わった。

「これ、美味しいよね」

リズは僕から水筒を受け取ると嬉しそうにもう一度紅茶に口をつけた。彼女の頭の中でこの香りはどのような世界を作っているのだろうか。彼女がこうした嗜好品を単なる飲食物として受け取るばかりでないことを僕は知っている。茶葉には花びらが混じっている。このお茶を淹れる時にはガラスのポットの熱湯の中に乾燥した草花が舞う。彼女の部屋に泊まった昨日の夜もこれを飲ませてもらった。寝る前に二人で分け合ったライトグリーンの飲み物が、二人の心に違った作用をもたらすのはなんとなく淋しいこともある。

背中に陽を浴びながら暖かい座席に腰掛けているうちに乗り換えの駅に着いた。いつもより鮮やかな色をした春の家々を、手元の iPhone を見ながら時たま眺めているうちに目的の駅に着いた。素晴らしい快晴である。あまりに明るい日差しが車窓からふんだんに差し込んでいたゆえに、ホームに降り立つとしめ切られた車内より温度が少しだけ低い。

電車を降りるとリズが手を繋いできた。手のひらはひんやりとして心地が良い。改札の近くに蜂のような見た目をした小さな虫が飛んでいてリズは驚いて半歩下がった。僕の手から逃れるように後ろに下がった指先を、力を入れて握った。

「これは多分刺さない虫だよ」

そう教えると、刺すから嫌なのではなくて虫自体が嫌なのだというのを公園に着くまでの十分ほど、ひたすら話していた。虫が大の苦手なのだ。

「でも、虫なんか慣れだと思っよ。家にゴキブリが出たらどうするの？」

「だって、うちにゴキブリとか出たことないもん」

前の日、リズの代わりに「ゴミ出しをした時に小さな茶色い虫がコンクリートの上を這っていたことは黙っておこうと決めた。本当にゴキブリなのか定かでないし、彼女をいたずらに驚かせたくはない。リズはそこそこの裕福な育ちに恵まれたので、東京に実家がありながら大学から数駅の場所で一人で暮らしている。家賃がいくらなのか知らないそうだが、こっそり同じマンションの賃料を調べたら十数万円くらいしていた。よい家でも、ゴミ捨て場まで部屋と同等の清潔さがあるわけではない。」

「絶対ゴキブリとか無理。もし出たら引越す」

虫嫌いの話はもう何度も聞いたことがある。人は嫌いなもののは何回でも繰り返してしまうものだ。もしも彼女がゴミ捨て場の茶色い羽虫を見かけてしまったら、僕が毎週ゴミを捨てに行つてあげなくてはならない。それはとても幸福だろうと、ひっそりと考えていた。

公園に入ると広い芝生が広がっていて、リズが言っていたチューリップは一輪も見当たらない。近くの看板で園内の地図を確認してみると思っていたより広くて、広場の奥に花壇があるのだった。リズの手を引いて芝生を進む。暖かい日が続いたために短い草葉の間から小さな白い花やタンポポが顔をのぞかせている。リズはそのう

ちの一つ、いっとう背の高いタンポポを摘んだ。日傘が閉じられる。手に余る長さの細い茎を両手に挟んで、手のひらを擦り合わせるようにして花を回し始めた。両手を合わせていると祈る姿勢と同じである。

中学の頃、遊園地にいた占い師に手相を見てもらった。里珠の珠という漢字が数珠の珠と同じ漢字・読みなので縁起が良くないと評されたと彼女は話したことがあった。それも自分の名前をカタカナにする理由なのだろうか。くるくると回転する黄色い花を上から眺めている女の顔をそっと見つめる。陽光が睫毛の影を白い頬に落としていく。黒い髪の毛が茶色く陽に透けている。近くに生えているシロツメクサで丸い輪っかが作れるならば、僕は彼女の重ねられた手にかけてやりたい。祈りをささげる彼女には、数珠つなぎの花輪がぴったりだろう。花飾りなど作れはしない僕は、タンポポを回したり振ったり、写真を撮ったりして遊んでいるリズの隣で黙っていることしかできない。彼女の iPhone の液晶に映った花と空は目の前にある光景よりも美しい。空の青さをそのままの美しさで他人に伝えることは今や当たり前のことだ。しゃがみこんだ僕たちの脇で、からだの半分をむしり取られたタンポポが、茎の中の空洞をぽっかりと空けて微風に揺れていた。

「はい、あげる」

一通り花を弄んだリズは萎れて柔らかくなった花を手渡してきた。出かけた先で見つけたものの写真を撮るのが趣味で、そのアカウントを友達以外にも公開している。彼女の写真は友達以外だけでなく、似たような趣味を持った人々のもとにも送られる。その日はまずはじめに中華そばが、続いてかわいらしい花がフオロワーの画面を通り過ぎていった。

「ありがとう」

僕はお礼をしながらその花を遠くに放り投げた。ちょん切られた花は、野辺に咲いている他の植物の中に紛れてすぐに分からなくなる。

リズはこうしてちよつとした物を手取るのが好きだが、それを最後まで持つていくことが苦手だ。花なんかは捨てるのがかわいそうな気がすると言って僕が代わりに捨てているし、食べ物は余れば捨てるか僕がもらうかしている。彼女は洋服や本なんかは人一倍持つていながら、その場で楽しむものに対してはそれ相応の対応しかしない。食べ物を捨てるなんてもつたいないと考えていた僕だが、彼女と接しているうちに気にならなくなった。むしろ、自分のものにするに値しないものは家に持ち帰らないという姿勢は、リズ特有の気品すら生み出しているように思う。先ほどの昼食でも、麺を最後のひと箸ぶんだけ残していた。彼女の考えを知りつつも、最後の一口こそが至高だと思つていられる僕はその残りをもらった。飲み会やなんかで他人がさんざん箸をつけた残り物に口をつける、ある種の引け目に対する快感さえ感じる。僕たちは食への態度は違つたが、二人でいれば何も問題は起こらない。リズはこの前、食べかけのケーキをほとんど残して母親に怒られたらしいが、僕たちの間ではそんなことにはならない。先ほどのそばのように、僕がリズの代わりに食べてしまえばいいのだ。

「手が汚れちゃったからトイレ行って洗ってくる」

「ウェットティッシュあるよ、使う？」

一通り野草を弄んだあと、満足した彼女は汚れた手のひらをこちらに向けた。濡れたティッシュでそれをふき取る。指の間をぬぐつてやるとくすぐつたいと手を震わせて紙をとられた。あると使う場面が多いウェットティッシュは、僕の必需品といえるが、意外と周りは持ち歩いていない。自分で思つているよりも綺麗好きな性格なのかもしれない。使用したティッシュには、緑が変色した茶色が濡れて薄く伸び、その色はあのハーブティーを紙の上に零したときとそっくりだった。ゴミを鼻をかんだティッシュと同じ袋の中に放り込んで全て鞆の中にしまった。

「捨てておくよ」

チューリップの花壇に行くまでの移動時間で、彼女はこんな話をした。タンポポは黄色い花で薄い黄緑色の茎をしているのに、茎の断面からは白い汁が溢れてくる。子どものころ、牛乳のように美味しそうだと思つて、切り口に口をつけて舐めてみた。すると優しい味のしそうな白い汁なのに、草の苦い味がいっばいに広がって慌てて唾を吐き出したという。

僕にも似たような経験がある。春の公園の芝生で兄弟三人でシャボン玉遊びをしていたとき、兄が両端を切り落としたタンポポの茎にシャボン液をつけて拭いていた。真似をして足元に生えていた花を口にくわえると……それ以降はリズと同じだ。僕を見て兄は腹を抱えて笑つたが、僕は兄がなぜ平気で苦い植物を口にしていたか不思議だった。その答えは単純で、手品を使ったというわけでもなく、八つ歳の離れた兄にとつて苦さが我慢できる範疇だったというだけだ。その話をするとあの苦さ我慢できるって舌おかしいよ、とリズも笑つた。

チューリップ畑はまだまだ遠い。せつかくなので遠回りをして池をぐるりと回つて行くことにした。水面のさざ波はみんな金色で、僕は眩しさに目を細めながら歩いた。うるさいくらい明るかったが、本当はとも静かな午後だった。リズの話はまだ続く。筆られた茎からにじ

み出してくるタンポポの液は、まるで血液のようですよ？
ひとつあくびをして、日傘の影の中で柔らかな笑顔を見せた。血も、時間が経つと色が変わるでしょ？ さつき手を拭いてくれたときおもったんだけど、私もし包丁で指を切ったらリクはすぐにティッシュくれるんだろうな
つて。とりとめのない話だ。

「もちろん拭いてあげるよ」

リクというのは僕の名前だ。リズが手を切るかもしれないなら、料理なんてしないでいいと僕は思う。家事サービスを雇って、全部やってもらえばいい。そのために僕は良いことに勤めてたくさん金を稼ぎたい。

歩いているうちにいつの間にか、リズの手が僕の手に中に納まっていた。公園に着く前とは違ってリズの手は熱くなっている。池を半分も回らないうちに、リズは歩くのが段々と遅くなっていて、立ち止まってしまった。

「もしかして眠い？」

「眠い……。昨日あんなに寝たのになんでだろう」

頭が左右にふらふらと揺れている。

「さつき飲んだ薬のせいだよ。あれ、よく効くけどすごく眠くなるよね」

あの薬のもたらす眠気は凄まじいものだ。春の初めに飲んだ時は、飲み会の間じゅうずっと机に突っ伏して寝てしまった。花粉症の薬で眠くなるかどうかは人によって差があると医者が言っていたので渡してしまっただが、やはり良くなかった。病院でもらった薬を他の人に渡してはいけないと知ってはいたのに。僕たちはチューリップを諦め、来た道を戻った。公園からだ、僕の家の方が近くて乗り換えもないのでリズを連れて行くことにした。

相変わらず空いている電車の中で、リズは僕の肩に頭を預けるでもなく壁側に寄りかかるでもなく、ずっと首を揺らしながら眠っていた。時折意識がはっきりして話しかけられるが、本当に眠いと分かる様子だった。頭の上で落ちそうになっているベレー帽を取ってあげると、前髪が上がつてしまい、汗ばんだおでこが出てきた。春に似つかわしくない紺色をした帽子は日光を集めて、髪の毛を蒸していた。

それから、半ば夢を見ている状態の彼女の腕を支えるようにして家まで引張っていった。僕の家は学生用アパートの四階で、家賃は安いが北向きで洗濯物は乾かないわエアコンの調子は良くないわという平凡な悪質さを備えている。部屋に虫が出たことはないが、共用部分のエントランスで踏みつぶされたゴキブリの屍骸を見かけたことがあるので一階の部屋には出るのかもしれない。

部屋に入るとリズはベッドに向かって一目散に進み、倒れるようにして横になった。寝息になりかけの深い呼吸をはじめた。洋服掛けの上に帽子の型が崩れないようにそっと置いて玄関に戻る。このまま眠ると思つて靴を並べなおした手を洗っていると声をかけられた。

「あつ！服がシワになっちゃう、脱がせて！」

僕は少し戸惑ったが、白いカーディガンを脱がせてハンガーに掛けた。

「ワンピースも！」

ベッドに腰掛けて両手を万歳の形に上げるリズは、まるで子供だ。少し後ろめたい気持ちになり、背中によく分らない汗をかいた。もし僕が金持ちになったら家事代行サービスではなくてリズの付き人の女の子を一

人雇いたい。僕のやりたいことのいくつかはあまり現実的でない。他に良い方法を考えるべきだろう。

一つ息を大きくはいてから脱がせにかかる。なかなか難しい作業で、背中のチャックに気づかずスカーフト部分をひっくり返したら服が傷むと怒られてしまった。白いタイツに包まれた脚が露わになる。リズはガーリーな恰好を好んでいる。頭と手を布をから抜こうと背中を手を回すと、下に来ていたシャツが汗ばんでいることに気が付いた。やっと身体から抜けたワンピースをカーディガンの横に丁寧に吊るした。

「バジヤマ着なよ」

僕はあまり着ていないスウェットをリズに着せた。そのときも彼女の背中が濡っていた。さっきの野原に両手をついたら、このぬくもりと湿り気を感じることができらるだろう。たくさん植物の生えた地面は、決まって濡れているものだ。

布団の中で蜂の羽音のような寝息を立てているリズの横で、僕は自分の iPhone でリズのアカウントを見返した。一日経つと消えてしまう写真が、タップ一つで表示される。中華そばとタンポポ。彼女の写真を見ていると色々なことが頭に浮かんでくる。

店主が夜な夜な密やかに煮出したこだわりのスープは黄金色に透き通っていた。みんなが列を作るに相応しいあたたかなスープに浮かんだ金色の油。まるで湖面のようだ。うす桃色をした半生の焼豚。野辺で戯れる幼い子供の血色の良い肌を思い出す。鮮やかな花のようなスープ。一杯一〇〇〇円の極楽。

タンポポの美しい写真だ。今日一日を振り返ってみると、黄色い花の印象がどの記憶にもついて回る。春らしい一日だった。こんな一日に足りない物があるとすれば

唯一つ、それはチューリップ。お椀を上に向けた形をした花々が並んで咲いているのを想像すると、花に興味がなかった僕でも、見たいという感情が強く押し寄せてくる。赤い色のチューリップも、黄色いものも、白いのも、花卉を開いたら中にはどれも同じおしべとめしべが一通り揃っているのだろうか。そんな単純な疑問も浮かんでくる。僕は、黒の混じった赤色のチューリップが今一番見たい。花びらの内側にこびりついた黄色い花粉と犬の鼻のように湿った黄色いめしべを観察したい。小学生の頃、みんなでスケッチした、盛りが過ぎて花の開きすぎた校庭のチューリップがぼんやりと思い出された。

「ああ、チューリップ！」

名残惜しさに鼻の名を声に出してみるが、何とも淋しいものだった。この部屋は北向きで昼でも薄暗い。僕はせめてもの楽しみに、リズの寝息でこの部屋が満たされることを願って、眠くもないのに彼女のベッドに潜り込んでゲームでもすることにする。起こさないように、そうと、そうと。